

## 惑わされてはならない

(マタイ24・3〜14)

一、かつて語られ、今語られ

3節に「イエスがオリブ山で座っておられると、〜とありますが、オリブ山からは、エルサレムを一望することができました。そういう状況で、弟子たちが質問しました。『お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか。』と。なぜ、こんなことを聞いたのでしょうか。理由は、その前の2節で、主が次のように語られたからです。「あなたがたはこれらの物すべてを見ています。まことに、あなたがたに言います。ここで、どの石も崩れずに、ほかの石の上に残ることは決してありません。』と。イエス時代にエルサレムに建っていた神殿は、たいへんに豪華な建物であったようです。ところが主イエスは、神殿の建物を指して、『どの石も崩れずに、ほかの石の上に残ることは決してありません』とおっしゃいました。当然のこと、弟子たちは聞きました。「お話しください。いつ、そのようなことが起こるのですか」と。

さて、ここで考えていただきたいことがあります。ここに書かれていることは、主イエスが十字架にかかられた週の、弟子たちとのやり取りです。紀元30年のことです。ですが、マタイが福

音書を執筆したときは、すでにエルサレムの神殿はありませんでした。紀元70年、第一次ユダヤ戦争においてローマ軍が攻めて来て、神殿を徹底的に破壊したからです。そういうわけで、マタイと当時の教会員たちは、主イエスが『どの石も崩れずに、ほかの石の上に残ることは決してありません』とおっしゃったとおりに、神殿が徹底的に破壊されてしまった姿を見ていました。そういう状況にあつて、マタイは福音書を著したわけです。「神殿はなくなりました。主イエスの来臨はまだ来ていない。再臨はいつあるのか。世の終わりの時には何が起こるのか」という、教会が抱えていた疑問をイエスさまに問うている、すなわち聖霊なる神に問うているのが、3節のことばの意味です。「お話しください。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか」と。教会は、主イエスが再び来られて、世界が終わることを知っていました。聖書を、イエス時代と福音書が執筆された時代とを重ねて読んで行くとき、より現実味のある書として迫ってまいります。

二、惑わされてはならない

4節をご覧ください。『そこでイエスは彼らに答えられた。「人に惑わされないように気をつけなさい。』とあります。主イエスは、そして聖霊は、「人に惑わ

されないように気をつけなさい」とおっしゃいましたし、今も語られています。なぜなら人間は、私たちは、惑わされやすいからです。5節です。『わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わします。』とあります。いつの時代にも、魅力的な指導者が現れます。いわゆるカリスマ性を備えた指導者です。この人に、この国の舵取りを任せたらうまく行くと期待するものの、途中からうまく行かなくなることが多々あります。神は、キリスト教会においても、一般社会においても、様々な人を立てられますが(↓ローマ13・1)、人に期待をしますと、失望に終わります。私共は、惑わされてはならないのです。

次に、6節を見てまいります。『また、戦争や戦争のうわさを聞くことになり、気がつけて、うろたえないようにしなさい。そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。』とあります。聖書の舞台となった地域は地続きですから、敵国が攻めて来ることに對して、絶えず緊張していたことと思われまふ。ですが主イエスは、そして聖霊は、「そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません」と語られています。軽はずみに世の終わりだと受け止めて、惑わされてはならないわけです。7節を飛ばして、8節をご覧ください。『しかし、こ

れらはすべて産みの苦しみの始まりなのです。』とあります。信仰者が心すべきは、神の善きご計画を信じることで。そして、耐え忍ぶことです。キリストを信じているなら、できます。13節です。『しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。』と語られています。

三、終わりの時はいつ？

神は善いご計画を持っておられます。それは、だれもが分かるものではなく、キリストを信じたときに、賜物として信じることができます。

神の、終わりについての「ご計画」が、14節に記されています。『御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。』がそうです。この聖句を、どのように理解したら良いのでしょうか。私は、(「いつ」のことかと考えます。神は造られたすべての人に福音を知らせ、一人ひとりが自分の決断で信じることを選んでほしいと願っていらっしやるのではないかと。私共が福音を知らせ、すべての人が自分の意思で、自分の決断で悔い改めること、すなわち方向転換することを、神は願っていらっしやいます。終わりの時は、人間が考える「いつ」ではなく、御国の福音が全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来るのが、「時」のようです。